

近々の透析医療の現場で思うこと

——ギリシア神話「プロメテウスの火」と物理学者朝永振一郎に学ぶ——

央戸 洋

要 旨

3.11 東日本大震災後、日本人は厳父としての自然に対して畏怖の念をもった。さらに社会のよって立つ基盤——科学そのものに疑問をもち、この国は変わらなければならないと感じた。物理学者朝永振一郎はかつて、ギリシア神話をひもときながら、科学への畏怖が大切であると述べ、同時にその原罪を説いた。それは現在の透析医療の抱える問題に通じるものである。

透析医療の今後の歩みの中で、医療側と透析患者双方にどんな視点が求められているのかを考察した。

緒 言

日本の透析医療はめざましい進歩をとげた。しかし、透析患者の医療費は高額で、年間で1.4兆円を超え、透析医療の根本が問われる事態となっている。3.11 東日本大震災を踏まえた現在、透析医療が内包する問題点を、ギリシア神話「プロメテウスの火」と物理学者でノーベル賞受賞者である朝永振一郎の著作を通して考察する。

1 ギリシア神話「プロメテウスの罰」

ギリシア神話の一つを紹介する。天地創造の時、大神ゼウスはプロメテウス（先に考える者）とエピメテウス（後に考える者）の兄弟に地上に生物を作るように命じた。エピメテウスはそれぞれの生き物が生き延びるための能力として、ある生き物には空を飛ぶための羽を与え、ある物には鋭い角、爪や牙を、あるいは

非常に速い脚を与えた。そして最後に人間を作った。ところが、他の動物にいろいろなものを与えてしまい、人間にはなにもなくなってしまった。それでは人間はもろもろの動物にやっつけられてしまうと考え、人間に火を与えたのである。

神々と人間とが争っていた時、プロメテウスが調停に入った。彼は食料である「牛」をほふった後、肉ではなく骨をゼウスに食べさせたのである。ゼウスは「神々が人間よりまずいものを食してよいものか」と激怒し、人間たちがようやく覚え始めた火の使用を禁じた。そこで困ったのが人間で、このままでは滅亡してしまう。そのためプロメテウスは一計を案じて大茴香の茎に包んで、天上の火を盗み出し人間に授けた。そのおかげで人間は生き延びることができたのである。しかし、プロメテウスは、「天の火を盗んで人間に与えたのはけしからん」とゼウスに激しく怒られてコーカサスの山の上へ鎖でつながれた。大鷲が、プロメテウスの肝臓をつついて食べてしまう。しかし、肝臓は再生するので、永遠にその罰を受け続けたのである^{1,2)}。

2 朝永振一郎の静かなる叫びと複合大災害

朝永は1970年代の講演の中で「プロメテウスの罰」を紹介し、“科学はプロメテウスがもたらした火のようなものであり、この神話は科学の力に対する恐れを意味しているのではないか”と述べた。

さらに、科学は我々の生活をより豊かにし、病気と労働の苦痛を減らし、人類は非常に繁栄してきた。しかし、人間は功利的な面にすっかり魅惑されてしまい、

人類全部を滅ぼすような原爆や公害、自然破壊が生まれてきたことを指摘している。そこで人間は科学に対する恐れ、「原罪」を心の中に持つ必要があると述べている。また、火山の爆発とか、山火事、雷などの恐ろしい自然現象だけに存在した火を人間がコントロールし、欲しい時に欲しいだけ手に入れたいという“知的な渴望を充たすことにおいては、畏怖の念を持つことが必要である”と結んでいる³⁾。

私達は、4年前の3.11東日本大震災の時に発生した福島第1原発の重大事故とその後の事故処理、汚染水問題をみる時、朝永の示唆に富んだ意見に耳を傾ける必要がある。原発は現代の「プロメテウスの火」であり、人類は「プロメテウスの罰」すなわち災厄を受けているのではないかとの問いを発せずにはおれない。

3 透析療法に対する畏怖の念が必要である

私はふと、人工透析療法も朝永が問いかけた科学（原発）と同じ存在ではないのかと感じる。透析患者の生は、一臓器の死を超えて生きるということである。それは、かつては必ず死が訪れた病において、それまでのヒトの自然の摂理に抗って生きるということである。私は、透析患者はそのことに畏怖の念を持ってほしいと思う。生きたいという欲求と生かされていることへの畏怖の念の双方が必要であり、透析ライフのベースにそのことをしっかりと敷いてほしいと思う。そしてまた、それで生業をなせる私達にも同じ謙虚さ・倫理観が強く求められるのは蓋し当然であろう。

春木は「感謝の気持ちを（怒りや不満よりも）いつまでも抱き続けることができる人達が、長期に生き残ることができる」、「感謝がまず透析で長生きする最大の秘訣である」と述べている⁴⁾。私はこれまで、一部透析患者のモンスター化を目の前にして、透析患者の心得としての「患者道」を呼びかけてきた⁵⁾。しかし、私の施設では、スタッフに対して「俺たちがいるから君達は給料がもらえるのだろう」と詰め寄る患者が後を絶たない。高価な延命医療を無料で受けられる制度、それを支える国民、そしてスタッフへの感謝の気持ちを持つ患者は、決してそのようなことを口にはすまい。

4 現代のプロメテウスの火——科学（者）の原罪

あの3.11の地震による津波と原発事故以後、大自然の前では、人間そして科学はいかに無力な存在であ

るかと思い知らされ、改めて自然への畏怖の念を持った。そして、人生のはかなさ（無常観）におそわれた。かつて寺田寅彦は、素晴らしい自然に恵まれた日本の大地を評し、深い慈愛に包まれた母なる土地（慈母）であるが、しばしば刑罰の鞭をふるって、とかく遊惰に流されやすい心を引きしめる厳父としての役割をも務めると述べている⁶⁾。

また、多くの国民は、経済優先の国造りは実はとてももろく、この社会は変わらなければいけないの思いを強くした。はたして人類は原発——科学技術をどう受け止めればいいのかを考えていた時に合ったのが「プロメテウスの火」であった。この物語は朝永の講演でよく引き合いに出されるが、どうしてギリシア神話なのか不思議に感じられた。

しかし、報道番組の「報道特集」で、先の大戦の終戦前夜に旧日本海軍が静岡県島田市で秘かに行っていた「最終兵器-殺人光線-Z」の開発研究者に、朝永振一郎と、同じくノーベル賞受賞者の湯川秀樹が名を連ねていたことを知った。それは強力電磁波兵器研究施設「牛尾実験所」であり、強力な電磁波を発生させる「マグネトロン」を開発し、敵のB29を撃ち落とす研究をしていたのである。朝永は、かつての戦争への協力を告白することはできず、ギリシア神話を引き合いに出しながら、二度と同じ過ちを犯したくないという科学者の矜持を示したものと考える。

吉田²⁾は「人間とは何か、どう生きねばならぬのかという謎への答えを模索したのがギリシア神話である」と述べている。そしてさらに、「科学の発達によって人間は今や、自然を破壊し、地球を自分達の住めぬ場所にしてしまいかねぬ危険に直面」しており、「そうせぬためには人間は、科学の目とは違う目で世界と自分自身を根底から見直す」ことが必要であると述べている。私達はこの指摘を深く、重く受けとめるべきである。

おわりに

医療の現場では、目の前の仕事で毎日が精一杯である。しかし、時にはその歩みを少し止め、文明——科学（者）の原罪を振り返ることが大切である。私達は、透析医療が「社会や文化になにをもたらし、なにを変化させてきたのか」を見据えるとともに、今後「どんな社会を築いていきたいのか」を論じる必要がある⁷⁾。

文 献

- 1) 阿刀田高：私のギリシア神話。東京：集英社，2002.
- 2) 吉田敦彦：ギリシア神話入門—プロメテウスとオイディプスの謎を解く。東京：角川書店，2006.
- 3) 朝永振一郎：プロメテウスの火。江沢洋編，東京：みすず書房，2012.
- 4) 春木繁一：サイコネフロロジーの臨床—長期透析患者の心理的問題。大阪：メディカ出版，2010.
- 5) 宍戸 洋：透析医療における一部患者のモンスター化についての考察。日透医誌，2011；26：540-544.
- 6) 寺田寅彦：日本人の自然観。東京：アズマリー，2010.
- 7) 柘植あづみ：生殖技術—不妊治療と再生医療は社会に何をもたらすか。東京：みすず書房，2012.